

レオン王国への聖イシドルス聖遺物奉遷（一〇六三年）再考

久米順子

一〇六三年十二月二三日、レオン・カステイリヤ王フェルナンド一世（一〇三八―一〇六五年在位）とサンチャ王妃は、王国の中心都市レオンにおいて聖イシドルスの聖遺物奉遷（トランスラテイオ）を大々的に執り行つた。それまで洗礼者聖ヨハネと聖ペラギウスの名を冠していた修道院は、以後、新たな守護聖人聖イシドルスの名で呼ばれることになる。これから見ていくように、この修道院はレオン王家と密接な関わりを持つていた。すなわちこの修道院の建設と聖遺物奉遷は、当時のレオン王家の美術政策の中軸を占める一大事業であった。

本論では、この修道院の創建と拡大の経緯を簡潔にまとめた後、文書史料などから聖イシドルスの聖遺物奉遷が行われた経緯を振り返る。次にこのとき制作された聖堂と寄進された典礼具について美術史的観点から分析を行う。フェルナンドとサンチャが作らせた工芸作品は、スペイン美術史ではレオン・カステイリヤの初期ロマネスクの作例として、つまり新時代の到来を告げる作品として必ず言及される存在である。当時最先端の美術様式が選択された理由は何だったのだろうか。また、そこで問題になるのは、イベリア半島南部のイスラーム圏からレオンへ奉遷された聖遺物が、何故西ゴート王国時代（七世

紀）の代表的教会人である聖イシドルスのものでなければならなかったのかという点である。それは一種の西ゴート・リヴァイヴァルだったのだろうか。本論はこうした一連の分析を通して、聖イシドルスの聖遺物奉遷を、十一世紀後半のレオン王家の過去と未来に対する眼差しに即して読み直す試みである。

サン・イシドロー・デ・レオンとインファンタード

一〇〇〇年頃、イベリア半島南部のカリフ国宰相アル・マンソール率いるイスラーム軍は毎年のように北部のキリスト教圏の都市や大修道院への夏季遠征を繰り返した。レオン王国の中心都市レオンも被害を免れなかった。襲撃からの復興に際して、レオン王アルフォンソ五世（九九九―一〇二七年在位）はレオン市内の別の場所にあった聖ペラギウスに捧げられた修道院を現在のサン・イシドロー・デ・レオン参事会聖堂近辺に再建した。スペイン語でサン・ペラーヨ San Pelayo と呼ばれる聖ペラギウスは、九二五年にコルドバで殉教したいわゆるモサラベ聖人のひとりである。しかし聖ペラギウスの聖遺物は、イス

ラームの襲撃に備えてレオンよりも北にある町オビエドに疎開したきり王都に戻ってこなかった。そこで一〇二八年、ローマから洗礼者聖ヨハネ San Juan Bautista の聖遺物が取り寄せられた。このときから一〇六三年に奉遷される聖イシドルスの名が定着するまでの数十年間、このレオンの修道院は聖ペラギウスと洗礼者聖ヨハネ両方の名で呼ばれることとなった。

そもそも聖ペラギウスの聖遺物をイスラーム支配下のコルドバからレオンに新設した修道院に奉遷させたのは、レオン王ラミーロ二世（九三一―九五〇年在位）の娘エルビーラ王女である。ラミーロ二世はエルビーラ王女に王国内の修道院とそれが所有する土地・住人に対する法的経済的支配権を与えていた。この前期中世の北スペイン王が娘である王女 *infanta* に与えた財産ならびにそれを管理する組織は、インファンタード *Infantado* ないしインファンタスゴ *Infantazgo* と呼ばれ、王女たちが美術作品の注文主となるための財政基盤として機能した¹。史料から知り得る限りでは、レオン市内の王宮に隣接するサン・サルバドル・デ・パラス・デ・レイ修道院 *San Salvador de Palaz de Rey* など *Palat de Rey* がエルビーラ王女に与えられたのがレオン王国の最古の例である。インファンタードの本部は、その後エルビーラ王女の手で聖ペラギウスに捧げられた修道院に移され、アルフォンソ五世による再建後は聖ペラギウスと洗礼者聖ヨハネの修道院すなわち後のサン・イシドロ・デ・レオンに置かれていた。本論の主人公のひとりであるサンチャもこの習慣通り父アルフォンソ五世からインファンタードを与えられ、サン・ペラーヨ・イ・サン・ファン・バウティスタ修道院の内部で育ち、長じて女主人 *domina* となつ

た。サンチャは、ナバーラ王国の王子にしてカステイリヤ伯であったフェルナンドと結婚した後も、この修道院を愛し続けた。やがてレオン王国のインファンタードは、サンチャの二人の娘、ウラーカ王女とエルビーラ王女に受け継がれることとなる²。

聖ペラギウスと洗礼者聖ヨハネの修道院は、王女をはじめ王家の女性たちを数多く擁していたが、男性共同体も併せ持っていた。そのため二人の守護聖人の名称は男女それぞれの共同体を指すと解釈されることもある。こうした男女共棲修道院は、西ゴート王国時代からイベリア半島では一般的だったが、後にいわゆるグレゴリウス改革がイベリア半島北部に波及すると批判的となって徐々に姿を消した。サン・イシドロ・デ・レオンの場合、アルフォンソ七世（一一二六―一一五七年在位）の妹であるサンチャ王女が一一四八年に女性共同体を他所に移してアウグスティヌス会則を奉じる男性共同体の参事会聖堂に転換させた。そして彼女の死をもってレオン王国におけるインファンタードは終焉を迎えた³。

聖イシドルスの聖遺物奉遷

聖イシドルスの聖遺物奉遷についての主要な史料は、一〇六三年十二月二二日の聖遺物奉遷当日の朝課において朗唱された『聖イシドルス奉遷記 *Translatio S. Isidori*』である⁴。この九章から成るテクストは、ほぼそのままのかたちで十二世紀初頭の『セミネンセ年代記』に収録されている⁵。十三世紀

になると、サン・イシドロー・デ・レオン参事会聖堂の参事会員で後にトウイ司教となつたルカス・トウデンシスの『聖イシドルス奇蹟譚 *Liber de Miraculis S. Isidori*』に『奉遷記』を大幅に膨らませた新ヴァージョンが見られる（作者は諸説あるが一般にはルカス自身の手に帰属される）⁶。これらとは別に、後述するように、奉遷にあつて国王夫妻が修道院へ与えた寄進状なども現存する。

一〇六三年の春、レコンキスタを進めるフェルナンド一世はメリダまで南下し、ここを拠点にセビーリヤ・タイファ国を寇掠した。セビーリヤ・タイファ王アル・ムタデイド（一〇四二—一〇六九年在位）は、フェルナンドが軍を退くことを条件に、軍事貢納金（パリアス）の確実な支払いと殉教聖女ユスタの聖遺骸の引渡しを約束した⁷。姉妹ルフィナとともにローマ時代の二八七年七月十九日に殉教した聖女ユスタは、七世紀にイスパニア式典礼が整備されたとき、そこに組み込まれた初期のイベリア半島出身の聖人の一人であり、セビーリヤの守護聖女として現在に至るまで篤い信仰を集めている⁸。

元サモス修道院長でレオン司教だったアルヴィートとアストルガ司教のオールドーニョは、フェルナンド一世の命を受け、ムニオ伯爵を従えて、彼女の聖遺物を引き取りに行った。ところがセビーリヤに到着してみると、アル・ムタデイドは実は聖女ユスタの所在は不明と一行に告白する。もし見つけることができれば持ち帰ってよいとの言葉を受け、探索隊一行は三日間の断食をして神に助けを求めた。するとレオン司教アルヴィートの夢に聖イシドルスが現われ、彼女の代わりに自分の聖遺物をレオンへ持ち帰れとその場所を司教杖で三回叩いて

教示した（*Hic, hic, hic, meum invenies corpus*）。さらにこの夢が真実であることを示すため、アルヴィートが問もなくこの世を去ることになると予告する。果たして聖イシドルスの墓はお告げの通り発見された。遺骸は杜松の木の箱に納められ、芳香を放っていたという。ただし正確な場所の記述は史料の何処にもない。そして聖イシドルスの予言通り、アルヴィートは聖遺物発見の七日後、レオン帰還前にセビーリヤで息を引き取った。アルヴィートの遺骸と聖イシドルスの遺骸は輿に載せられ、おそらく銀の道をレオンへ北上した。

これが聖イシドルス奉遷の経緯である。つまり、聖イシドルスは探索の途上でピンチヒッターとして急遽浮上した聖人だったことになる。

聖イシドルス（五六〇頃—六三六年）は、セビーリヤ司教を務めた西ゴート王国時代の聖職者であった。当時の主要な宗教会議でイスパニア式典礼の確立に努め、政教両面に大きな影響を与えた一方、学者、著作家、教会博士としても知られ、『語源論 *Eymologiae sive Origines*』、『命題集 *Sententiae*』、『修道会則 *Regula monachorum*』、『事物の本性 *De natura rerum*』、『年代記 *Chronica*』、『ゴート史 *Historia Gothorum*』など幅広い分野の著作がある。ちなみに兄レアンデル（五五〇頃—六〇一年）も聖職者で、外交使節として派遣されたコンスタンティノーブルの宮廷で後の教皇大グレゴリウスと親交を結び、後年彼の大著『ヨブ記註解 *Moralia in Job*』を献呈されるなど、スペイン教会とローマ教会との結合を固め、西ゴート・スペインの政治、文化、宗教に重要な役割を果たした。もう一人の兄フルゲンティウスもエシハ司教となった聖職者で妹フロレンティナも修道

女という、信仰の道に身を捧げた一家であった。

その聖イシドルスの聖遺物奉遷（トランスラティオ）は次のように行われた。まず一〇六三年十二月二日、レオン市内の聖ペラギウスと洗礼者聖ヨハネの修道院で新しく建て直された聖堂の奉獻式が行われた。その翌日、レオンへ到着した聖イシドルスの聖遺物奉遷式が執り行われた。国王フェルナンド一世と王妃サンチャは、この式典に集った高位聖職者と大貴族を召集し、宮廷諮問会議（クリア）を開催、息子たちへの王国分割相続という王国の一大事を決定した¹⁰。併せて壮大な宴会も催され、王をはじめ王妃や王子・王女たちが自ら聖職者たち招待客の給仕にあたり、謙讓の姿勢を示した¹¹。

フェルナンド一世とサンチャ王妃の新聖堂

このとき奉獻された新聖堂は、サンチャ王妃（一〇六七年没）の発案によつて、レオン王家の墓所としての役割をも担うこととなった。十二世紀初頭にレオンかその近郊（一説にはサン・イシドロ・デ・レオン）で記された『セミネンセ年代記』によれば、サンチャ王妃はレオン王家のみならずフェルナンドの出自であるナバラ王家の祖先の亡骸をもサン・イシドロに集めて埋葬し、合わせて自分たちの墓所とする計画を立て、夫フェルナンドを説得した¹²。そしてサンチャ王妃の父アルフォンソ五世が再建したばかりの「土壁とレンガでできた *ex luto et lateri*」聖堂を「石造 *lapidea*」建て直した¹³。一九七〇年代に現存聖堂の床石が剥がされてウイリアムズらによる調査が

行われたが、彼がまとまった調査報告を出すまで三〇年以上かかったこともあり、その成果が十分に知られないまま推測に基づく研究が積み重ねられた結果、現在の議論は錯綜している¹⁴。思い切つて単純化すると以下のようになる。フェルナンドとサンチャが初めて石造で聖堂を建てた（アルフォンソ五世の聖堂を含め、それ以前の建築の痕跡は発見されていない）。しかしすぐに手狭になったため、彼らの子ども、孫世代がこの聖堂の北壁の一部を利用する形で数次にわたつて東南へ拡張していった。聖堂の西側には王室霊廟（パンテオン）、その上階部にトリビューンが建設され、王室霊廟の天井は一面の壁画で飾られた。ただしこれら聖堂西側付属施設の建造年代や王室霊廟の柱頭彫刻、壁画の制作年代はいまだに決着を見ていない。

サンチャとフェルナンドの聖堂は、中央身廊が側廊よりも高く、東西の長さ約一三メートル、トランセプトなしの石造三廊式バシリカである。そのプランはレオン王国の前身であるアストウリアス王国時代（八―十世紀）の建築様式に忠実で、とりわけ八九三年献堂のサン・サルバドル・デ・バルデイス *San Salvador de Valdedios* のプランに酷似している。ヘラルド・ボトはサンチャとフェルナンドの聖堂の祭室部分がロマネスク建築に典型的な半円形であった可能性を考慮に入れようとするが¹⁵、ウイリアムズはこれに否定的で方形祭室を主張する¹⁶。アストウリアス地方にはサン・ペドロ・デ・テベルガ *San Pedro de Teverga*（十一世紀）のように方形祭室のロマネスク建築も存在する。サン・イシドロもこの系譜に連なるものとされてきているが、もしこの先、新たな発掘調査などによつて、実はすでにローマ式典礼に対応した半円祭室プランが採用

されていたことが実証されるようなことがあれば、レオン王国へのロマネスク建築の波及年代も典礼変更の問題も従来の解釈を大きく変えなければならぬことになるだろう。

フェルナンド一世とサンチャ王妃の注文作品

先述のように、サン・イシドロー・デ・レオンには、フェルナンド一世とサンチャ王妃の寄進状が残っている。王付き書記アリアス・デイエグス Arias Diéguez が作成したこの文書は、西ゴート文字で六七×五〇センチメートルの獣皮紙にしたためられている¹⁷。

「神、救世主の御名において、三にして一、一にして三なる父と子と聖霊の御名において。キリストの卑しく小さな僕たる我ら、王フェルナンドと王妃サンチャは、福者イシドルスの遺体をセビーリヤより我らが町レオン市内の司教、聖職者たちの手で洗礼者聖ヨハネの教会に奉遷させた。かくて、このような荘厳に与る名誉を前に各地から召集されて敬虔に集った司教たちと多数の聖職者たちを前に、前述した場所の洗礼者聖ヨハネと福者イシドルスに対して、我らは次の祭壇用装飾品を奉納する。エメラルド、サファイア、あらゆる種類の貴石、ガラスが象嵌され見事に作られた純金製の祭壇前衝立、一点。各祭壇にひとつずつ銀の祭壇前衝立、計三点。金の王冠、三点。ひとつは環に六つのアルファが吊り下げられたもの。もうひとつは内側から真珠 (atale) を吊り下げた王冠。三つ目は、金とエマールユで

飾られた水晶玉飾り (annemate) の王冠で、私自身の頭の金の王冠 (diadema capitis mihi aureum) である。金で覆われた水晶の小箱。エマールユと貴石で装飾された金の十字架。キリスト磔刑像の象牙の十字架。金の大皿付きの金の香炉、二点。持ち重りのする銀の香炉。エマールユで飾られた金のカリスとパテナ。金銀の装飾が施された金のストラとエマールユ飾りのついた銀のストラ。金細工の施された象牙箱、一点。銀細工の施された象牙箱、二点。そのうちのひとつは、中に同じ素材の三つの小箱が収められている。彫刻の施された象牙の二連板 (ディプティク)。金縁取りの祭壇前衝立、三点。祭室用の大カーテン (lotzori)、一点と、アーミンの毛皮の小カーテン、二点。金で縁取りされたマント、二点。金糸で織られた絹製マント。紫の縁取りのビザンティン風マント。金で縁取りされたカズラ一点とダルマティカ二点。金糸で織られた絹のカズラ。テーブルセットすなわち塩入れ、大皿、はさみ (トング)、十点の小匙と大匙。金鍍金された燭台、二点。金のエンブレム (? angina)。器 (? astrotoma)。あれらすべての金鍍金された銀の容器と、二つの取っ手のついた前述の器。(後略)」

省略した後半部分には、土地と住民を含む修道院や村を、免税特権・司法権と併せてレオンのこの修道院へ寄進する旨が述べられている。文書の最後には、立ち会った証人たちの名前とサインが連ねられる。カステイリヤ伯家出身でナバール王妃となったフェルナンド一世の母マジョール、レオン前国王ベルムード三世の未亡人ヒメナ、フェルナンドとサンチャ、彼らの五人の子どもたち、八人の司教、九人の大修道院長、伯爵た

ちと聖職者たちである。レオン・カステイリヤ王国内の人物がほとんどだが、出席した司教のひとりにはフランスのル・ピュイ司教ペトルスである。彼は一〇五三年以降、叔父のエステバンを継いでル・ピュイの司教の座にあつた。クリュニー修道院長オデイロンはペトルスの祖父の兄弟にあたり、その家系はクリュニーと結びつく¹⁸。フェルナンド一世はクリュニー修道会と祈禱盟約を結んだが、そのことと関連している可能性もある¹⁹。

さて、寄進状前半に挙げられた品々のリストだが、同時代の同種の文書と比較したとき、典礼用の写本が含まれていない点が奇異である。フェルナンドとサンチャが作らせた写本は《ベアトウス黙示録註解フアクンドウス本》(スペイン国立図書館 Vlt. 142、一〇四七年)、《サンチャ王妃の語源論》(エル・エスコリアル修道院付属図書館 Ms. 13、一〇四七年)、《フェルナンド一世の祈禱書》(サンティアゴ・デ・コンポステラ大学図書館 Reg. 1、一〇五五年)、《サンチャ王妃の聖書賛歌》(サラマンカ大学図書館 Ms. 2668、一〇五九年)の四冊が現存している。これら以外にも制作させた可能性はきわめて高く、すでに別の機会にサン・インドローに奉納したのかもしれない。

王冠についての描写からは、西ゴート王国時代を代表する金工作品《レクスウイント王の宝冠》(マドリッド、国立考古学博物館)に代表される通称「グアラサールの宝物」の奉納冠の数々を想起しないわけにはいかない。聖堂の三つの祭壇にそれぞれ奉納冠として吊り下げるためのものだったと推測されるが、フェルナンド自身の王冠を寄進した点に彼のこの聖堂への思い入れの深さが表われているようで興味深い。

寄進状と現存する作品で一致するのは、ロマネスク象牙彫の傑作として知られる《フェルナンド一世の磔刑像》(マドリッド、国立考古学博物館)²⁰のみである。下部に FERDINANDVS REX SANCTIA REGINA と銘があることから間違いない。十字架のキリストの足元に冥府のアダムが佇む一方、頭上には IHC NAZARENVS REX IVDEORVM の銘文と、死を克服して復活した「勝利のキリスト」が十字架を手にして描かれる。十字架の縁には小さな裸体が絡み合い、一見混沌としているが、悪人と善人が分かたれていない特殊な最後の審判図となっている。裏面は、中央に贖罪の子羊、四隅に福音書記者のシンボルが配置され、残りの腕木部分を怪獣模様が埋め尽くす。この十字架は後に病床のフェルナンド一世の枕元に掲げられたり葬列で用いられたりした可能性が指摘されている²¹。

フェルナンドとサンチャが制作させたであろう作品としては、他に《聖インドルスの聖遺物箱》(現存する銀の内箱はサン・インドロー・デ・レオン参事会聖堂宝物室)、またこの奉遷式のために作られたものと断定はできないが《至福の箱》(マドリッド、国立考古学博物館)や《玉座のキリストの象牙装丁板》(パリ、ルーヴル美術館)がある。おそらくこれより少し前に制作された《ヨハネとペラギウスの聖遺物箱》(サン・インドロー・デ・レオン参事会聖堂宝物室)、また《カリソの磔刑像》(レオン美術館)をはじめとする数点の象牙作品や、フェルナンドたちの息子アルフォンソ六世が姉ウラーカ王女と作らせた《オビエドの聖櫃》(オビエド大聖堂)など、象牙・金属工芸問わずレオンの宮廷工房に帰属される作品は数多い²²。

《聖インドルスの聖遺物箱》はサン・インドロー聖堂の主祭

壇に置かれていたもので、アンブローシオ・デ・モラーレス（二五二一—一五九一年）によるディスクリプションにしたがえば²³、観者は柵越しにエマーユや象嵌技法で豪華に飾られた聖遺物箱を目にすることができるようになっていた。消失した金の外箱は、中央に父なる神が、周囲に十二使徒その他の図像が配置されていたというから、図像的には《オビエドの聖櫃》と相似していたようである。銀の内箱も一部消失したものの、アダムの創造から樂園追放に至る『創世記』の諸場面を打ち出し技法で表わし、一部金鍍金した銀板が数枚残る。四人の従者を従えるフェルナンド一世像があることから、おそらく同様のサンチャ王妃像が対になつていただろう。これまでヒルデスハイムの青銅扉（一〇一五年）が図像的源泉として、また技法的に類似した作品として指摘されてきているが²⁴、レオンの聖遺物箱には「アダムとエバに衣服を与える神」などドイツの司教ベルンヴァルトによる扉には見られない稀な図像も含まれている²⁵。

《至福の箱》もフランス軍侵攻の際に破壊されて銀の被覆が消失し、天使と書を手にする聖人が一組ずつアーチの中に描かれた七枚の象牙板が残るのみである。先の寄進状に含まれる象牙箱のいずれかに該当した可能性はあるが、文書では人像彫刻への言及はないため断定できない。《玉座のキリストの象牙装丁板》は、十字架の上の玉座のキリスト、四福音書記者シンボル、聖ペテロと聖パウロ（トラディティオ・レギス）、樂園の河など初期キリスト教美術に連なる図像を多く含み、全体として複雑な図像プログラムを構成している。

《ヨハネとペラギウスの聖遺物箱》も金の覆いと蓋が戦乱で

焼失し、現在は二五点の象牙板のみ残る。洗礼者聖ヨハネと聖ペラギウスの名前、フェルナンドとサンチャの名前、一〇五九年の年記を含む銘文があったという古いディスクリプションから、聖イシドルスの聖遺物奉遷に先立って国王夫妻が寄進した作品と考えられる。図像的には、側面に十二使徒、上部に神の子羊、四福音書記者シンボル、聖ミカエル、聖ラファエル、樂園の四本の河、天使たちとその他の人間を配する。この図像プログラムはイスパニア式典礼と関連付けられる一方、様式的にはプレロマネスクとロマネスクを繋ぐ過渡期の作例として位置づけられる²⁶。

これらはすべてまとめてレオンの宮廷工房作とされることが多いが、実際には宮廷工房がどこにあったのか、どのようなものだったのかということについてはほとんど何もわかっていない。技法や図像の点から見ると、ピレネーの北出身の工匠が関与した可能性は極めて高い。一方、《聖イシドルスの聖遺物箱》の内側には、セビーリャ・タイファ王アル・ムタデイドから贈られたという伝承のあるイスラームの動物模様の織物が使われている²⁷。サン・イスドローには、聖ペラギウスの聖遺物箱として用いられた十一世紀のイスラーム圏制作のハート形の銀の小箱や、制作・伝来時期は不明だが当時スペイン北部の海岸に到来していたヴァイキングとの接触を示すセイウチの骨の透かし彫りが伝わるなど、レオン・カステイリヤ王家が王国を取り巻く多様な文化圏と持っていた交渉が跡付けられる。先の寄進状にも、アラビア語起源の *alauie*, *annemate*, *lozon* をはじめ、宝飾品や布地の名称などに外国語起源と思われる単語が頻出している。

聖イシドルスの聖遺物奉遷再考

実は、一〇六三年の時点までに聖イシドルスが聖人として崇敬された形跡はほぼ皆無である。四月四日に聖イシドルスの名を含むイスパニア式典礼の聖人暦は、一〇五二年のシロス写本をはじめ十一世紀の例が残る²⁸。しかしまだ聖イシドルス伝は存在しなかった。一〇六三年以前にレオン国内で聖イシドルスを筆頭聖人とする修道院はわずかに三つを数えるのみで、それもひとつはセビーリヤの聖イシドルスではなくキオス島の聖イシドルスだった²⁹。民衆からの崇敬もなかったことは、レオン大聖堂関連文書においてイシドルスという名を持つ人物の初出が一〇〇〇年以降であることから裏付けられる³⁰。

聖人崇敬は、聖人、聖遺物、奇蹟の三位一体の上に成り立つと言われるが³¹、聖イシドルスの場合、聖遺物はここで初めて（しかも本人の自己申告という形で）登場した。奇蹟譚はようやく十三世紀にルカス・トゥデンシスらサン・イシドロー・デ・レオンに関わる人間の手により成立する³²。フェルナンドたちが奉遷のために作らせた典礼具や聖遺物箱にしても、そこに表された凶像は人類創造から原罪へいたる物語、神かそれにかわる神の子羊、福音書記者像、十二使徒像、国王夫妻像が中心である。すなわち人類の原罪と救済が主要なテーマになっており、聖イシドルスの姿はどこにも見当たらない。実は《聖イシドルスの聖遺物箱》は誰の聖遺物が来てもいいような作りになっているのである。その点で、同じ象牙彫とはいえ、ほぼ同年代にレオンの東のナバーラ王国、サン・ミリヤン・デ・ラ・コゴーリヤ修道院のために制作された《聖エミリアヌスの聖遺

物箱》とはまったく性格が異なっている。こちらでは聖人伝テキストとそれに基づく凶像が成立しているのに対し³³、聖イシドルス凶像は、サン・イシドロー聖堂の《子羊の門》の上部に聖ペラギウスと対に置かれた十二世紀の彫刻（髭のない若い容貌で、右手で祝福の仕草をし、左手に司教杖を持つ）と十二世紀末のサン・イシドロー伝来写本挿絵（『聖マルティノ著作集』写本第二巻第六二葉のイニシャル装飾。白髪に司教冠をかぶり、右手で祝福の仕草、左手に司教杖）、わずかこの二点しか前期中世の作例はない³⁴。つまり聖イシドルスは一〇六三年にはじめて聖人としてスポットライトを浴びるようになった存在なのである。逆に言えば、このときレオン王家は、自らの靈廟にふさわしい聖人として聖イシドルスを選択したことになる。そして一〇六三年以降、王家がサン・イシドロー・デ・レオンを順次拡張していくことで、聖イシドルス信仰はレオン王周辺で高められていったのである。フェルナンドとサンチャの娘ウラーカ王女の墓碑銘には、彼女は聖イシドルスを取りわけ愛し彼に仕えたと記された³⁵。聖イシドルスはまたアルフォンソ七世の妹サンチャ王女の「夫」としても言及される³⁶。このように聖イシドルス崇敬の発展はレオン王家とくにその女性メンバーに負うところが大きい。

それでは聖イシドルスが新たなレオン王家の靈廟を擁する修道院の守護聖人として選ばれたのは何故だろうか。当初名前の挙がっていた聖女ユスタは、セビーリヤのローカルな聖人である。しかもレオン王国がレコンキスタを推し進めて街を奪還した後ならばともかく、いまだにセビーリヤはタイファ国の支配下にあった。

十二使徒のひとり聖ヤコブならばあるいはふさわしかったかもしれない。フェルナンド一世はコインブラ攻略の折にサンティアゴ・デ・コンポステラ詣でを行っているが、同地で教会再建などの大掛かりな事業は展開していない。そもそもサンチャ王妃の兄ベルムード三世を戦いで討つてレオン王となつたフェルナンドは、当初レオンの人々に歓迎されない存在であつた。フェルナンドとベルムード三世の対立において後者の肩をもつた時のコンポステラ司教クレスコニウスは、フェルナンドの王位就任後も長い間レオンへ姿を見せなかつた³⁷。クレスコニウスは一〇五三年に未来のガリシア王となるフェルナンドとサンチャの末子ガルシア王子の教育を託されている³⁸。一〇五五年にフェルナンド夫妻が主宰したコジャンサ公会議には出席し、一〇六三年の聖イシドルス聖遺物奉遷には司教と王子のみならずガリシアの司教たちも馳せ参じていることから、フェルナンドの治世後半には両者の関係は修復されたことがわかる。しかしレオンから遠く離れたガリシアの地の司教をコントロールするのは国王にとつても困難だつたに違いない³⁹。クレスコニウスは「使徒の座の司教」の名称を使用したかどにより一〇四九年のランス公会議でローマ教皇レオ九世から破門されたが、コンポステラにおける司教の権力に揺るぎはなかつたほどであつた。こうした司教権との緊張関係の中で、聖ヤコブの聖遺物をコンポステラから引き離すのは難しかっただろう。

それにしても、聖イシドルスは殉教者ではない。単なる証聖者 *confessus* にすぎず、民衆の心を十分に捉え得る聖人とは言い難い⁴⁰。しかしサンチャ王妃が莊嚴化に力を尽くしたサン・

イシドーロの聖堂は巡礼者のためのものではなく、いわば宮廷付属礼拝堂だつたため、民衆や巡礼者を惹きつける必要はなかつた⁴¹。重要だつたのは、彼女と夫がともに西ゴート王国の血筋に連なることを示すことだつた。聖イシドルスは、偉大な西ゴート文化と正統信仰のシンボルとしてこの上なくふさわしい存在だつたのである⁴²。

こうしてみると、聖イシドルス奉遷は一種の西ゴート・リヴァイヴァルであつたと言える。そして、フェルナンド一世の西ゴート回帰志向は、これ以外にも確認できる。まず一〇三八年六月二二日レオン大聖堂での王即位式にあつて彼が行つたのが、西ゴート王国時代に由来する塗油の儀式であつた⁴³。一〇五五年に彼と妻サンチャがレオン南東三八キロメートルのコジャンサ村（現バレンシア・デ・ドン・ファン）へレオン王国とナバラ王国（カラオーラとパンプローナ）の司教、大修道院長を召集して開催したコジャンサ公会議は、西ゴート時代の教会の再興・再生を目指したものと評価されている⁴⁴。フェルナンドはクリユニー会と接触していたにもかかわらず、過去の西ゴート王国時代を理想像として掲げること、フランスやローマといった外部の力を借りずに王国内の教会改革を行おうとしたのである。さらにフェルナンドは一〇六五年に死ぬ直前、自分が妻と建てさせたサン・イシドーロの聖堂でイスパニア式典礼に参加して聖職者とともに歌い、悔悛の儀式を執り行った⁴⁵。フェルナンド一世はその治世の間、ついにローマ式典礼への切り替えに踏み切ろうとしなかつた。

聖イシドルスは西ゴート時代の「古き良きイスパニア」再興を象徴する存在だつた。その聖遺物奉遷という大事業に最高の

輝きを与えるために、フェルナンド一世とサンチャ王妃は最善を尽くそうとしたのだろう。象牙、金銀といったありつたけの高価な材料と当代随一の腕を持つ工匠たちを出自不問でかき集めたに違いない。その結果生み出された祭壇を飾る作品群は、後にロマネスク様式と呼ばれることになる新しい様式的特徴を一部に備えることとなった。しかし《フェルナンド一世の磔刑像》裏面に充満する怪獣模様をはじめ、それらには同時にレオンの地ならではのローカルな要素も含まれている。この夫妻が創出した、一方では最先端の、他方では折衷的な美術は、結果的にカステイリヤ、ナバーラ、レオンの伝統が入り混じったフェルナンドとサンチャ時代の王権に似つかわしいものだったといえるだろう。

注

- 1 インフアンターゴについては以下の研究を参照。VIÑAYO GONZÁLEZ, Antonio, "Reinas e Infantas de León, abadesas y monjas del Monasterio de San Pelayo y San Isidoro", *Semana de historia del monacato cántabro-leonés (XV Centenario del Nacimiento de San Benito)*, Oviedo, 1982, pp. 123-135; HENRIET, Patrick, "Deo votas: L'Infantado et la fonction des infantes dans la Castille et le León des X^e-XII^e siècles", HENRIET, Patrick, LEGRAS, Anne-Marie (eds.), *Au cloître et dans le monde. Femmes, hommes et sociétés (IX^e-XV siècles). Mélanges en l'honneur de Paulette L'Hermite-Leclercq*, Paris, 2000, pp. 189-201.
- 2 以下の拙稿で本論の主人公のひとりサンチャ王妃の娘であるウラーカ王

女の美術パトロネージ活動を扱った。「宮廷と修道院の間で——レオン王国の王女たちによる美術パトロネージと初期スペイン・ロマネスク」『西洋美術研究』（三元社）第十五号、二〇〇九年、六四―八三頁。

- 3 HENRIET, "Deo votas", art. cit., p. 199.
- 4 スペイン国立図書館第一二二番写本 *Liber Scintillarum*, f. 105v.
- 5 PÉREZ DE URBEL, Justo, GONZÁLEZ RUIZ-ZORRILLA, Arlano (eds.), *Historia Silense*, Madrid, 1959, pp. 199-204. Vid. GÓMEZ-MORENO, Manuel, *Introducción a la Historia Silense con versión castellana de la misma y de la Crónica de Sampiro*, Madrid, 1921 (スペイン語訳) ; BARTON, Simon, FLETCHER, Richard (trans.), *The World of El Cid: Chronicles of the Spanish Reconquest*, Manchester, 2000, pp. 9-64 (英語抄訳) . この年代記は長らく『シロスの年代記 Historia Silense』と呼ばれてきた。しかし現在ではこれがサント・ドミンゴ・デ・シロス修道院で書かれた可能性はきわめて低いと考えられるため、本論では誤解を招きやすいこの通称を避け、ラテン語の別称を採用する。
- 6 LUCAS TUDENSIS, *Milagos de San Isidoro*, León, 1992 (Juan de Robles による一五二五年のスペイン語訳の校訂出版) ; ESTÉVEZ SOLA, Juan A. (ed.), "Historia Translationis Sancti Isidori", *Chronica Hispana Saeculi XIII* (Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis 73), Turnhout, 1997.
- 7 *Historia Silense*, op. cit., pp. 198-199.
- 8 VIÑAYO GONZÁLEZ, Antonio, "Cuestiones histórico-críticas en torno a la traslación del cuerpo de san Isidoro", *Isidoriana. Estudios sobre san Isidoro en el XIV centenario de su nacimiento*, León, 1961, p. 288.
- 9 *Historia Silense*, op. cit., p. 198.
- 10 長男サンチョがカステイリヤ、次男アルフォンソがレオン、三男ガルシアがガリシアを与えられた。父親のフェルナンドの死後に勃発した

- 兄弟間の争いを制したのはアルフォンソで、レオン・カステイリーヤ・ガリシアを再併合してアルフォンソ六世（レオン王として一〇六五—一〇九年、カステイリーヤ王として一〇七二—一〇九年在位）となった。
- 11 *Historia Silense*, *op. cit.*, pp. 203-204.
- 12 *Historia Silense*, *op. cit.*, p. 197.
- 13 これらの言葉の出典は、一〇六三年の聖堂奉獻の際に彫られた碑文 “HANC QVAM CERNIS AVLAM SANCTI IOHANNIS BAPTISTE OLIM FVIT LVTEAM QVAM NUPER EXCELLENTISSIMVS FREDENANDVS REX ET SANCIA REGINA AEDIFICAVERVNT LAPIDEAM” (SUÁREZ GONZÁLEZ, Ana, “Al pie de la letra. Inscripciones y manuscritos de los siglos X al XVII”, *Real Colegiata de San Isidoro de León. Relicario de la monarquía leonesa*, León, 2007, p. 198) ‘なるが如きサン・ヤンズーロ修道院の王冠禮龕ごもしたアルフォンソ五世の墓碑 “FECIT ECCLESIAM HANC DE LUTO ET LAFERE” ヲンヘネナンズ一世の墓碑 “FACTI ECCLESIAM HANC LAPIDEAM QUAE OLIM FUIT LUTEA” (WHITEHILL, Walter Muir Jr., *Spanish Romanesque Architecture of the Eleventh Century*, Oxford, 1941, pp. 145-146) による。
- 14 近年のサン・ヤンズーロ・ド・レオン研究は以下を参照。AA.VV., *Real Colegiata de San Isidoro de León. Relicario de la monarquía leonesa*, León, 2007; FERNÁNDEZ GONZÁLEZ, E., PÉREZ GIL, J. (eds.), *Alfonso VI y su época. I. Los precedentes del reinado (966-1065)*, León, 2007; Idem, *Alfonso VI y su época. II: Los horizontes de Europa (1065-1109)*, León, 2008; MARTÍN, Therese, “Una reconstrucción hipotética de la portada norte de la Real Colegiata de San Isidoro, León”, *Archivo Español de Arte* 81 (2008), pp. 357-378; PRADO-VILLAR, Francisco, “*Lacrimae Rerum*”, San Isidoro de León y la memoria del padre”, *Goya* 328 (2009), pp. 195-221; MARTÍN, Therese, “Vie et mort dans le Panthéon de San Isidoro de León”, *Les Cahiers de Saint-Michel de Cuxá* 42 (2011), pp. 153-164; AA.VV., *Alfonso VI y el arte de su época, Anales de Historia del Arte* 2011 (Vol. Extra 2), Universidad Complutense de Madrid; BANGO TORVISO, Isidro (coord.), *Alfonso VI y su legado. Actas del congreso internacional Sahagún, 29 de octubre al 1 de noviembre de 2009. IX centenario de Alfonso VI (1109-2009)*, León, 2012; BOTO VARELA, Gerardo, “*In Legionensy regum cimiterio*. La construcción del cuerpo occidental de San Isidoro de León y el amparo de los invitados a la Cena del Señor”, *Monumentos singulares del románico. Nuevas lecturas sobre formas y usos*, Aguilar de Campoo, 2012, pp. 91-135.
- 15 BOTO VARELA, Gerardo, “Arquitectura medieval. Configuración espacial y aptitudes funcionales”, *Real Colegiata de San Isidoro de León. Relicario de la monarquía leonesa*, León, 2007, pp. 51-103.
- 16 WILLIAMS, John, “San Isidoro Exposed: The Vicissitudes of Research in Romanesque Art”, *Journal of Medieval Iberian Studies* 3-1 (2011), pp. 93-116.
- 17 サン・ヤンズーロ・ド・レオン 参事会副会長 禮龕 Inv. Núm. 125. BLANCO LOZANO, Pilar, *Colección diplomática de Fernando I (1037-1065)*, León, 1987, n.º 66, p. 169; MARTÍN LÓPEZ, María Encarnación, *Documentos de los siglos X-XIII. Colección diplomática, Patrimonio cultural de San Isidoro de León. A. Serie documental, II*, León, 1995, n.º 6, pp. 26-29.
- 18 ISLAFREZ, Amancio, *Memoria, culto y monarquía hispánica entre los siglos X y XII*, Jaén, 2006, pp. 102-103.
- 19 BISHKO, Charles Julian, “Fernando I y los orígenes de la alianza castellano-leonesa con Cluny”, *Cuadernos de Historia de España*, 47-48 (1968), pp. 31-135, 49-50 (1969), pp. 50-116 = “Fernando I and the Origins of the Leonese-

- Castilian Alliance with Cluny”, *Idem, Studies in Medieval Spanish Frontier History*, London, 1980, pp. 1-136.
- 20 『世界美術大全集 7 西欧初期中世の美術』小学館 一九九七年収録のカラー図版および安發和彰氏による解説を参照。
- 21 WERCKMEISTER, Otto-Karl, “The First Romanesque Beatus Manuscripts and the Liturgy of Death”, *Actas del Simposio para el estudio de los códices del ‘Comentario al Apocalipsis’ de Beato de Liébana, I***, Madrid, 1980, pp. 174-80; WALKER, Rose, “The Wall Paintings in the Panteón de los Reyes at León: A Cycle of Intercession”, *Art Bulletin* 82 (2000), p. 202.
- 22 *The Art of Medieval Spain A. D. 500-1200* (cat. exp.), Metropolitan Museum of Art, New York, 1993; BANGO TORVISO, Isidro G., “La piedad de los reyes Fernando I y Sancha. Un tesoro sagrado que testimonia el proceso de la renovación de la cultura hispana del siglo XI”, *Marravillas de la España medieval. Tesoro sagrado y monarquía* (cat. exp.), Valladolid, 2000, vol. 1, pp. 223-227; FRANCO MATA, Ángela, *Arte leonés (siglos IV-XVI) fuera de León*, León, 2010; FERNÁNDEZ GONZÁLEZ, Eitelvina, “Imagen, devoción y suntuosidad en las aportaciones de Fernando I y Sancha al tesoro de San Isidoro de León”, GARCÍA DE CORTÁZAR, José Ángel, TEJA CASUSO, Ramón (coords.), *Monasterios y monarcas: fundación, presencia y memoria regia en los monasterios hispanos medievales*, Aguilar de Campoo, 2012.
- 23 Ambrosio de Morales 山本原文 著 VINAYO GONZÁLEZ, Antonio, “San Isidoro y León”, *San Isidoro. Doctor Hispaniae* (cat. exp.), Sevilla, León, Cartagena, 2002, pp. 136-138 山本引用を参照。
- 24 WILLIAMS, John, “Tours and the Medieval Art of Spain”, *Florilegium in honorem Carl Nordenfalk octogenarii contextum*, Stockholm, 1987, pp. 197-208.
- 25 DURLIAT, Marcel, *Espagne romane*, Pierre-qui-vire, 1993, p. 81.
- 26 FRANCO MATA, Ángela, “El Tesoro de San Isidoro y la monarquía leonesa”, *Boletín del Museo Arqueológico Nacional* 9 (1991), pp. 35-68.
- 27 GÓMEZ-MORENO, Manuel, “El Arca de las reliquias de San Isidoro”, *Archivo Español de Arte y Arqueología* 8 (1932), pp. 205-212.
- 28 LINAGE CONDE, Antonio, *Los orígenes del monacato benedictino en la Península Ibérica*, 3 vols., León, 1973, II, p. 915.
- 29 DESWARTE, Thomas, *De la destruction à la restauration: l’idéologie du royaume d’Oviedo-León (VIII^e-XI^e siècles)*, Turnhout, 2003, p. 217.
- 30 MARTÍNEZ SOPENA, Pascual (coord.), *Antropomínia y sociedad: sistemas de identificación hispano-cristianos en los siglos IX a XIII*, Valladolid, 1995, p. 174.
- 31 渡邊昌美 『中世の奇蹟と幻想』岩波新書 一九八九年。
- 32 HENRIET, Patrick, “Un exemple de religiosité politique: Saint Isidore et les rois de León (XI^e-XIII^e siècles)”, DERWICH, M., DIMITRIEV, M. (dirs.), *Fonctions sociales et politiques du culte des saints dans les sociétés de rite grec et latin au Moyen Âge et à l’époque moderne. Approche comparative*, Wrocław, 1999, pp. 77-95.
- 33 BANGO TORVISO, Isidro G., *Emiliano, un santo de la España visigoda, y el arca románica de sus reliquias*, [San Millán de la Cogolla], 2007.
- 34 ROBLES, Constantino, LLAMAZARES, Fernando, *Real Colegiata de San Isidoro. Historia, Arquitectura y Arte*, León, 2008, p. 97. 山本の註を参照。
- 35 “La iconografía isidoriana en la Real Colegiata de León”, SOTO RÁBANOS, José María (ed.), *Pensamiento medieval hispano. Homenaje a Horacio Santiago-Otero*, 2 vols., Madrid, 1998, I, pp. 141-181.
- 36 “MULITIS MUNERIBUS DITAVIT, ET QUIA BEATUM ISIDORUM SUPER OMNIA DILIGEBAT, IJUS SERVITIO SE SUBJUGAVIT” (WHITEHILL,

Spanish Romanesque Architecture of the Eleventh Century, *op. cit.*, p. 151) .

- 89 WALKER, Rose, "Sancha, Urraca and Elvira: The Virtues and Vices of Spanish Royal Women 'Dedicated to God'", *Reading Medieval Studies* 24 (1998), pp. 116-117.
- 90 ISLA FREZ, *op. cit.*, p. 96.
- 88 RUIZ ASENCIO, José Manuel (ed.), *Colección documental del archivo de la catedral de León (775-1230)*, IV (1032-1109), León, 1990, n. 1090.
- 89 ISLA FREZ, *op. cit.*, p. 51.
- 90 HENRIET, Patrick, "Rex, *lex*, *plebs*. Les miracles d'Isidore de Séville à León (XI^e-XIII^e siècles)", HEINZELMANN, Martin, HERBERS, Klaus, BAUER, Dieter (eds.), *Mirakel im Mittelalter: Konzeptionen, Erscheinungsformen, Deutungen*, Stuttgart, 2002, p. 337.
- 41 MARTIN, Therese, *Queen as King. Politics and Architectural Propaganda in Twelfth-Century Spain*, Leiden, Boston, 2006, p. 51.
- 42 HENRIET, "Rex, *lex*, *plebs*", art. cit., p. 349.
- 43 VIÑAYO GONZÁLEZ, Antonio, *Fernando I (1035-1065)*, Burgos, 1999, p. 61.
- 44 ESTEPA DÍEZ, Carlos, *El reinado de Alfonso VI*, Madrid, 1985, p. 100.
- 45 *Historia Silense*, *op. cit.*, p. 207. Vid. BISHKO, Charles Julian, "The Liturgical Context of Fernando I's Last Days: According to the So-called 'Historia Silense'", *Hispania Sacra* 17 (1964).